

臨床の場における看護研究の難しさと求められる支援

Support for Difficulty of Research in Nursing Practice

前野 真由美 永田 由紀子 島田 美佐 神吉 敬子

MAENO Mayumi NAGATA Yukiko SHIMADA Misa KANKI Takako

I. はじめに

A 病院の看護研究勉強会に参加した看護師に「看護研究という言葉から連想することば」を尋ねたところ、「難しい」と答えた者が一番多かった（2005年）。中田ら¹⁾の看護師の看護研究に対する意識調査においても、研究に対するイメージは「難しい」であった。

看護研究をする看護師の「難しい」はなぜなのだろうか。「難しい」ときは、どうしているのだろうか。支援を求めているのだろうか。看護研究を困難にする阻害因子²⁾について、また、看護研究に対する意欲の有無と阻害因子³⁾について明らかにし、支援策を述べている文献はある。しかし、その対処方法、それでも残る問題について述べた文献をみつけることができなかった。

看護師は、看護研究の難しさに直面した時に、何らかの対処をして、研究を続けている。その対処方法、また、自分では対処しきれなかった、問題として残ったものを明らかにし、臨床の場で看護研究を行う際の看護師の求める支援を考えたい。次の2つを目的とした。

II. 目的

1. 看護研究の「難しい」の成因と「難しい」への対処方法を明らかにする。
2. 研究を行う看護師の求める支援を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究対象

2006年3月に看護研究を終了したA病院の看護師10人。看護師の平均年齢は24.1(±2.13)歳。臨床経験年数は4.1(±2.13)年。研究回数は1.4(±0.7)回であった。

2. 調査期間

2006年12月

3. データ収集方法

- 1) 半構成的面接法

プライバシーの保てる病院の部屋。面接時間は30分。面接内容はノートに記録した。

2) 質問項目

- ①看護研究は難しかったですか。
- ②どうして難しかったですか。
- ③難しいときは、どのように対処しましたか。
- ④どのような支援が欲しかったですか。

以上の質問項目は、話のきっかけとし、看護研究についての思い、考えを自由に語ってもらった。

4. データ分析方法

1) 言葉の分析

ノートに記録した言葉の分析を行った。なるべくそのままの言葉を用いて、分析した。

2) 言葉をまとめる

- ①類似した言葉をまとめ、まとめた言葉がわかるような表題をつけた。
- ②①で得た表題の類似したものをまとめて表題をつけた。

このような作業を、これ以上まとめることができないところまで行った。

3) カテゴリにする

まとめることができなくなった最後のもの、大カテゴリを【 】とした。その前のもの、中カテゴリを《 》、また、その前のもの、小カテゴリを[]とした。

4) 大カテゴリ【今後の看護研究に対する意思】を成す中カテゴリ《今後、看護研究をやる》《やりたくない》の2群別に看護研究について述べた言葉を見る

2)の作業から、《今後、看護研究をやる》《やりたくない》にまとまった2群別に、看護研究について述べた言葉を見た。

5) データ分析は期間をあけ、繰り返し行った。また、研究は、質的研究者から助言を受けた。

5. 倫理的配慮

研究対象者の所属する看護部に研究目的、方法、倫理的配慮を説明し、承諾を得た。看護師には、文書にて、次のことを説明し、承諾を得た。

1. 研究の目的、2. 調査の方法、3. 参加は自由意志であり、中断も可能である。それによる不利益を受けることは一切ない、4. データ内容は、研究以外の目的には利用しない、5. 個人が特定されないように処理する、6. 研究は、静岡県立大学倫理委員会の承認を得ている

IV. 結果

1. 看護研究について述べた言葉 (表1)

看護師10人の述べた言葉は、283個であった。類似した言葉をまとめた結果、38の小カテゴリ、18の中カテゴリを得た。そして、さらに、類似した中カテゴリをまとめ、次の6つの大カテゴリを得た。【看護研究は難しい】【看護研究が「難しい」への対処方法】【看護研究ができた】【求める支援】【看護研究は必要である】【今後の看護研究に対する意思】。

表 1. 看護研究について述べた言葉

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ
看護研究は難しい	看護研究自体が難しい	テーマの決定が難しい
		研究方法の決定が難しい
		文献検討が難しい
		データ収集が難しい
		データの分析が難しい
	研究結果の考察と報告の作成が難しい	
	患者、家族、病棟の改善につながらない	患者・家族の満足につながらない 病棟の改善につながらない
	病棟スタッフとの連携がない	研究者だけで行っている感じがする 病棟の看護師の協力がいない 病棟の看護補助職員の協力がいない
	人的資源が不足している	研究のメンバーがいなくなる 研究指導を十分に受けられない
	物的資源が不足している	時間の確保が難しい 費用がかかる
看護研究が「難しい」への対処方法	研究メンバーでやった	研究メンバーで考えて行った
	病棟スタッフからの支援を得る	師長にみてもらう 病棟の看護師、看護補助職員からの支援を受ける
	医師からの支援を得る	医師から教えてもらう
	文献を用いる	質問項目作成時、文献を用いた
看護研究ができた	看護研究自体はできた	テーマの決定ができた
		データの収集ができた
		データの分析ができた
		研究結果の考察と報告の作成ができた
求める支援	病棟スタッフと連携してやりたい	病棟の看護師、看護補助職員の全員でやりたい
	人的資源が欲しい	研究の得意な人が欲しい 適した研究メンバー数がほしい
	物的資源が欲しい	時間を確保してほしい 費用がほしい
看護研究は必要である	自分の看護に看護研究は必要である	自分で研究することは必要である 他者の研究は必要である
	病棟の看護に看護研究は必要である	病棟が関心を持つようになる 看護の質があがる
	病院以外の看護に看護研究は必要である	学会で関心をもたれる
今後の看護研究に対する意思	今後、看護研究をやる	やる やりたくないが、条件があえばやる
	今後、看護研究をやりたくない	やった方がいいとは思うが、やりたくない やりたくない

1) 大カテゴリ 1:【看護研究は難しい】

【看護研究は難しい】と述べた者は10人全員であった。その大カテゴリは、次の中カテゴリ5つから成った。《看護研究自体が難しい》《患者、家族、病棟の改善につながらない》《病棟スタッフとの連携がない》《人的資源が不足している》《物的資源が不足している》。

このうち、述べた者が多かったものから、1位、看護研究自体が難しい(10人)、2位、物的資源が不足している(9人)、3位、病棟スタッフとの連携がない(5人)であった。

2) 大カテゴリ 2:【看護研究が「難しい」への対処方法】

【看護研究が「難しい」への対処方法】を述べた者は9人であった。その大カテゴリは、次の中カテゴリ4つから成った。《研究メンバーでやった》《病棟スタッフからの支援を得る》《医師からの支援を得る》《文献を用いる》。

このうち、述べた者が多かったものから、1位、病棟スタッフからの支援を得る(8人)、2位、研究メンバーでやった(5人)であった。

3) 大カテゴリ 3:【看護研究ができた】

【看護研究ができた】と述べた者は6人であった。その大カテゴリは、小カテゴリ「テーマの決定ができた」などから成る中カテゴリ《看護研究自体ができた》から成った。

4) 大カテゴリ 4:【求める支援】

【求める支援】を述べた者は8人であった。その大カテゴリは、次の中カテゴリ3つから成った。《病棟スタッフと連携してやりたい》、小カテゴリ「研究が得意な人が欲しい」などから成る《人的資源が欲しい》、《物的資源が欲しい》。

述べた者が多い順から、1位、人的資源が欲しい(7人)、2位、病棟スタッフと連携してやりたい(4人)、物的資源が欲しい(4人)であった。

5) 大カテゴリ:【看護研究は必要である】

【看護研究は必要である】と述べた者は10人全員であった。その大カテゴリは、次の中カテゴリ3つから成っていた。《自分の看護に看護研究は必要である》《病棟の看護に看護研究は必要である》《病院以外の看護に看護研究は必要である》。

述べた者が多い順から、1位、自分の看護に看護研究は必要である(7人)、2位、病棟の看護に看護研究は必要である(6人)であった。

6) 大カテゴリ:【今後の看護研究に対する意思】

【今後の看護研究に対する意思】と述べた者は9人。その大カテゴリは、2つの中カテゴリ《今後、看護研究をやる》《今後、看護研究をやりたくない》から成った。

今後、看護研究をやる」と述べた者は5人、《今後、看護研究をやりたくない》と述べた者は4人であった。

中カテゴリ《今後、看護研究をやる》は、次の小カテゴリ2つから成った。[やる][やりたくないが、条件があればやる]。また、中カテゴリ《今後、看護研究をやりたくない》は次の小カテゴリ2つから成った。[やった方がいいとは思いますが、やりたくない][やりたくない]。

表2. 《今後、看護研究をやる》《今後、看護研究をやりたくない》別にみた看護研究についての言葉

		今後、看護研究をやる n=5		今後、看護研究をやりたくない n=4	
		人	%	人	%
看護研究は難しい	看護研究自体が難しい	5	100	4	100
	患者、家族、病棟の改善につながらない	2	40	1	25
	病棟スタッフとの連携がない	2	40	3	75
	人的資源が不足している	2	40	1	25
	物的資源が不足している	5	100	3	75
看護研究が「難しい」への対処方法	研究メンバーでやった	2	40	3	75
	病棟スタッフからの支援を得る	3	60	4	100
	医師からの支援を得る	1	20	0	0
	文献を用いる	2	40	1	25
看護研究ができた	看護研究自体はできた	2	40	3	75
求める支援	病棟スタッフと連携してやりたい	0	0	3	75
	人的資源が欲しい	4	80	2	50
	物的資源が欲しい	3	60	1	25
看護研究は必要である	自分の看護に看護研究は必要である	4	80	3	75
	病棟の看護に看護研究は必要である	4	80	2	50
	病院以外の看護に看護研究は必要である	1	20	0	0

2. 大カテゴリ【今後の看護研究に対する意思】を成す中カテゴリ《今後、看護研究をやる》《今後、看護研究をやりたくない》の2群別にみた看護研究について述べた言葉（表2）

《今後、看護研究をやる》群、《今後、看護研究をやりたくない》群の2群別に、看護研究について述べた言葉をみた。

1) 《今後、看護研究をやる》群の看護研究について述べた言葉 n=5

《今後、看護研究をやる》群の看護研究について述べた言葉は次のようであった。大カテゴリを成す中カテゴリの3人以上をみた。大カテゴリ【看護研究が難しい】は、中カテゴリ《看護研究自体が難しい》5人、《物的資源が不足している》5人から成った。【看護研究が「難しい」への対処方法】は、《病棟スタッフからの支援を得る》3人から成った。【求める支援】は、《人的資源が欲しい》4人、《物的資源が欲しい》3人から成った。【看護研究は必要である】は、《自

分の看護に看護研究は必要である》4人、《病棟の看護に看護研究が必要である》4人から成った。

2) 《今後、看護研究をやりたくない》群の看護研究について述べた言葉 n=4

《今後、看護研究をやりたくない》群の看護研究について述べた言葉は次のようであった。大カテゴリを成す中カテゴリの3人以上をみた。大カテゴリ【看護研究が難しい】は、中カテゴリ《看護研究自体が難しい》4人、《物的資源が不足している》3人、そして、《病棟スタッフとの連携がない》3人から成った。【看護研究が「難しい」への対処方法】は、《病棟スタッフからの支援を得る》4人、そして、《研究メンバーでやった》3人から成った。【看護研究ができた】は、《看護研究自体ができた》3人であった。【求める支援】は、《病棟スタッフと連携してやりたい》3人から成った。【看護研究は必要である】は、《自分の看護に看護研究は必要である》3人から成った。

V. 考察

大カテゴリ【看護研究が難しい】は、中カテゴリ《看護研究自体が難しい》、《物的資源が不足している》、《病棟スタッフとの連携がない》から成った。小カテゴリ【テーマの決定が難しい】などから成る《看護研究自体が難しい》は、田中らの「グループ研究経験者は、論文作成などの研究の各段階で困難を感じていた」⁴⁾と似た。また、【時間の確保が難しい】などから成る《物的資源の不足している》は、南沢らの、「臨床看護研究実施上の困難は、研究時間の確保である」⁵⁾と似た結果であった。

【看護研究が「難しい」への対処方法】は、《病棟スタッフからの支援を得る》、《研究メンバーでやった》から成った。【求める支援】は、【指導者が欲しい】などから成る《人的資源が欲しい》、《病棟スタッフと連携してやりたい》《物的資源が欲しい》から成っていた。

看護師全員は、【看護研究は必要である】と述べていた。しかし、【今後の看護研究に対する意思】では、《今後、看護研究をやる》と《今後、看護研究をやりたくない》に分かれた。

《今後、看護研究をやる》《今後、看護研究をやりたくない》別に看護研究について述べた言葉を見ると、違いがみられた。

【求める支援】においては、《今後、看護研究をやる》群では、【研究の得意な人がほしい】から成る《人的資源が欲しい》《物的資源が欲しい》から成るが、《今後、看護研究をやりたくない》群では、《病棟スタッフと連携してやりたい》から成っていた。【看護研究が難しい】においては、《今後、看護研究をやる》群では、《看護研究自体が難しい》《物質的資源が不足している》が主たるものであるが、《今後、看護研究をやりたくない》群では、これらに加えて、《病棟スタッフとの連携がない》から成っていた。【看護研究が「難しい」への対処方法】においては、《今後、看護研究をやる》群の《病棟スタッフから支援を得る》に加えて、《今後、看護研究をやりたくない》群では、《研究メンバーでやった》から成る。結果から、《今後、看護研究をやりたくない》群は、看護研究の難しさには、病棟スタッフとの連携のなさを述べ、求める支援には、病棟スタッフとの連携を述べていると考える。

【看護研究は必要である】では、《今後、看護研究をやりたくない》群では、《自分の看護に看護研究は必要である》から成る。《今後、看護研究をやる》群では、加えて、《病棟の看護に看護研究が必要である》から成っていた。

結果から、次のように考えた。《今後、看護研究をやる》群は、病棟スタッフの協力を得て、自

分の看護だけではなく、病棟の看護のためにも看護研究が必要と考えている。そして、研究する自分の役割を見い出している。そのため、【求める支援】は、よりよく研究するための手法を指導する人、研究仲間の確保である。しかし、《今後、看護研究をやりたくない》群においては、病棟のスタッフから協力を得ることができず、病棟の看護のために研究に繋がれずにいる。【求める支援】は、病棟スタッフと連携してやりたいに留まっている。

以上のことから、臨床の場において、①今後の研究意欲につながる看護研究を行う、②自分だけではない、臨床の場がよりよくなる看護研究を行っているという自覚を看護師が持つための支援を次のように考えた。

1. 病棟スタッフが、研究者である看護師を支えるという環境を作る。
2. 看護研究自体を指導する人を確保する。
3. 時間の確保などの物的資源を確保する。

上記の1のためには、次のことを行う人の存在が必要であると考えます。

1. 研究を行う看護師の研究の意義などを病棟スタッフに伝える。
2. 研究を行う看護師と病棟スタッフを支える。
3. 研究終了後、研究を行う看護師と病棟スタッフが行った研究を意味あるものと確認する。

黒田は、看護師が看護研究を行う際には、時間確保や経費のほかに、周囲からのサポートが必要である⁶⁾と述べている。今回の研究においても、同じ見解に至ったと考える。自分だけではない、臨床の場がよりよくなる看護研究を行っているという自信をもち、今後も積極的に研究に挑むためには、病棟スタッフの温かいサポートはかせないことが示唆された。

VI. 結論

臨床経験4年前後、看護研究が初めてであった看護師10人を対象に、半構成的面接法を用いて、看護研究について述べてもらった。その後、述べた言葉を分析、考察した。

結果、看護師全員が、看護研究は難しいと述べた。そのうち、9人は難しさに対処していた。看護研究の難しさは、①看護研究自体が難しい、②時間確保が難しいなどの物的資源の不足、③病棟スタッフとの連携がない、であった。難しさへの対処は、病棟スタッフからの支援によってできていた。求める支援としては、①指導者などの人的資源の支援、②病棟スタッフと連携してやりたい、③物的資源の支援であった。看護師全員は、看護研究は看護に必要であると、述べていた。しかし、今後、看護研究を行うか否かは、病棟スタッフとの連携の有無によって決定されていた。

VII. おわりに

本研究結果を受けて、A病院は、病棟スタッフの一員である看護補助職員に看護研究の必要性を理解してもらおうと意識し、努めは始めている。内容は次のようである。看護補助職員を看護研究メンバーの一員にする。看護補助職員が、院外の勉強会に参加できるよう時間を確保する。また、現在すでに行っているが、多職種でなる勉強会に、看護補助職員が参加する。

この論文の結果の一部は、第38回日本看護学会 - 看護管理 - で発表した。

引用文献

- 1) 中田葉子, 山崎のぞ美, 今保貴子, 他: K 院看護師の看護研究に対する意識調査 (第1報) - スタッフと管理職側からみたスタッフの意識の差を比較して -, 第34回日本看護学会論文集 (看護管理), p239-p241, 2003.
- 2) 平松みどり, 河合敏子, 山田恵子, 他: 臨床看護研究の支援体制を充実させる取り組み - 研究に取り組んだ看護師の面接から「阻害因子」を知る -, 第35回日本看護学会論文集 (看護管理), p9-p11, 2004.
- 3) 大崎ゆきえ, 西川博子, 土居泰美: T 病院における看護研究に対する意欲の有無と阻害因子, 第35回日本看護学会論文集 (看護管理), p15-p17, 2004.
- 4) 田中雅重, 立花めぐみ, 永井郁代, 他: 臨床での看護研究活動における困難と看護研究推進への課題, 第36回日本看護学会論文集 (看護管理), p484-p486, 2005.
- 5) 南沢汎美, 雄西智恵美, 数間恵子, 他: 臨床研究実施上の困難と克服課題第一次調査報告, 日本看護科学, 18(1), p52-p59, 1998.
- 6) 黒田久美子: 臨床実践に本当に役立つ臨床看護研究を行うために病院はどのような環境を整えるべきか, インターナショナルナーシングレビュー, 29(1), p23-p28, 2006.

(2009年1月9日 受理)